『御文』のこころ

―蓮如上人からの手紙―

廣瀬 惺

東本願寺出版

はじめに

本書は、『同朋新聞』（二〇一三年二月号～二〇一四年一月号）に連載された廣瀬惺氏の「蓮如上人からのメッセージ―御文に学ぶ―」（全十二回）に加筆・修正をいただき、書籍化したものです。

東本願寺出版発行『真宗大谷派勤行集（赤本）』に収載されている「御文」四通に加え、一帖目第一通のほか代表的な「御文」全八通の全文とそのあじわいを掲載しており、また書籍化にあたって、本書で取り上げているすべての「御文」に意訳を付していただきました。

本書をきっかけとして、一人でも多くの方が、日々、蓮如上人の『御文』を拝読され、上人が本願念仏の教えをあらゆる人に届けようと、苦心してしたためられたメッセージを聴く生活がはじまっていくことを願っています。

目次

一　蓮如上人と『御文』（一）……11
法然・親鸞・蓮如　12
真宗再興　15

二　蓮如上人と『御文』（二）……19
『御文』をあらわされた心　20
『御文』とは　23

三　御同朋として　一帖目第一通（一）……27
真宗再興に向けて　31
道を覆（おお）うもの　33

四　生涯の課題　一帖目第一通（二）……39
教えの要（かなめ）　42
宗教生活　45
五　誓願の心　五帖目第一通……49
本願との出遇（であ）い　51
おもい立つこころ　54
六　心を開く　五帖目第二通……57
「後世（ごせ）」を知る　60
開かれた世界　62
七　獲信（ぎゃくしん）と利益（りやく）　五帖目第五通……67
本願の信心　70
念仏の利益　73

八　はじめに名号あり　五帖目第八通……79
南無阿弥陀仏の本願　83
疑心を超えて　86
九　教えの根本　五帖目第十通……89
信心を本（ほん）とす　91
本願との関係　95
十　報恩講のこころ　五帖目第十一通……99
聖人のご入滅　104
仰せにたまわる信　107
十一　白骨の御文　五帖目第十六通（一）……111
白骨の遺教（ゆいきょう）　114
人生の一大事　117

十二　願に生きる　五帖目第十六通（二）……121
弥陀をたのむ　122
願に生きよ　124
おわりに……129

凡例

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

・各項冒頭の『御文』原文は、東本願寺出版発行の『真宗聖典』にもとづいていますが、読みやすさを考慮して、著者の見解をもとに改行を施しました。

・本書の『御文』および『蓮如上人御一代記聞書』の意訳は、法藏館発行の『意訳真宗聖典』・『現代の聖典　蓮如五帖御文』・『現代の聖典　蓮如上人御一代記聞書』を参考にして著者が訳しました。

・本文、引用文中の括弧の中、および「意訳」と注記した引文は著者の意訳です。

一　蓮如上人と『御文』（一）

■法然・親鸞・蓮如

印度・中国・日本と、出家仏教を表街道とする仏教の歴史の中を地下水のように流れ続けてきた本願念仏の教えは、歴史上、法然上人によってはじめて「浄土宗」の名のもとに立宗されました。そして、親鸞聖人によって徹底して明らかにされ、さらに、蓮如上人の尽力によって今日の私たちのところに届けられているのであります。かつて、作家の五木寛之氏は、その三人の方がなされたお仕事について、次のような言葉であらわしてくださいました。

法然は、「大事なことを、易しく」おこなうことを教えた人である。（略）親鸞は、「易しいことを、深く」きわめようとした人であった。（略）蓮如は、「深いことを、広く」伝えようと、渾心の力をこめて生き抜いた人であった

（『蓮如』前進座公演パンフレットより）

私たちは、日々の仕事やさまざまな出来事の中で、追われるように生きています。そのような私たちにとって「大事なこと」、それは「生死出ずべき道」を明らかにすることであると教えられています。迷いを出る道であり、さらにいえば、

本当に生き、本当にいのち終えていくことのできる道といってよいでしょう。その大事な道について法然上人は、「自行化他、ただ念仏を縡とす（自らに対しても、他の人に対しても、ひとえに念仏をすすめることを私の生涯としてきました）」（『選択本願念仏集』）と述べておられますように、「念仏申せ」の一言にすべてをこめて説いていかれたのです。

親鸞聖人は、その法然上人の教えに遇われ、一人の在家念仏者として生きていかれることによって、「念仏を申す」とはどのようなことなのか、その生涯をとおして尋ね明らかにしてくださったのであります。明らかにしてくださった眼目は、「念仏を申す」とは、念仏にまでなってくださっている弥陀の本願（私たちの大地となり、呼びかけ続けてくださっているまこと）をいただいて生きることであるということです。『歎異抄』をあらわした唯円房は、そのことを、「聖人のつねのおおせ」として次のように伝えています。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめし

たちける本願のかたじけなさよ

（五劫という長い時をかけて、南無阿弥陀仏というすがたをとってくださった弥陀の本願をよくよくいただいてみますと、それは、ひとえに親鸞一人を救おうとしてでありました。まことに、はかりしれない罪や悩みを抱えている身を、たすけようと思い立ってくださった本願の何とかたじけないことでありましょうか）

（『歎異抄』後序　真宗聖典六四〇頁）

「つねのおおせ」とは、いつもおっしゃっておられたお言葉ということであり、さらには、聖人の生活そのものが語っていた言葉であるといただかれます。

そして、親鸞聖人が亡くなられて百五十四年目に生まれられた蓮如上人。上人は、法然・親鸞のお二人によって打ち立てられ明らかにされた本願念仏の教えを、広く多くの人々に手渡し、また、後の世にまで末永く相続されるようにとの願いをもって、八十五年の生涯を渾身の力をこめて生き抜いてくださったのであります。

■真宗再興

蓮如上人（以下、上人）は、「真宗再興の上人」と称されています。上人は、本願寺第八代住職として戦国乱世の世を生きていかれましたが、上人が生まれられた頃は、さまざまな異義がはびこり、真宗の教えの真義（本当のこころ）が失われようとしている状態でした。また本願寺はさびさびとしたありさまで、参詣する人はほとんどいなかったと伝えられています。そのような中で上人は、四十三歳にして本願寺住職を継承されると、

御代に仏法を是非とも御再興あらん

（我が一代のうちに仏法を是非とも再興しよう）

（『蓮如上人御一代記聞書』第一四三条　真宗聖典八八〇頁）

との、真宗再興の志願をもって教えの真義を明らかにし、人々に念仏のこころを伝えようとご苦労されたのであります。

上人の「真宗再興」については、上人の実母が父・存如の正妻ではなく、存如が正妻を迎えるにあたって本願寺を出て行かれる時に、六歳の上人を前に、

ねがわくは、児の御一代に聖人の御一流を再興したまえ

（『蓮如上人遺徳記』）

と託していったことによるとも伝えられています。

上人の真宗再興の事業を、当時の人々はどのように受けとめていたのでしょうか。それについては、上人の言行録といえます『蓮如上人御一代記聞書』の中で、次の二カ条に述べられています。

一つは、第一二条目ですが、親鸞聖人を讃えて覚如上人があらわされた『報恩講式文』の一節、

木石の縁を待ちて火を生じ、瓦礫の鈿を磨りて珠を為すがごとし。

（真宗聖典七三九頁）

に託して、上人を再興の上人であると称されています。すなわち、風雨にさらされている木や石や瓦や礫のように、自他ともに存在の意義をみとめられなかった人々に対して、存在の意義に目覚めさせ、生きる喜びを開いていかれたから再興の上人であるというのです。

そして、今一つが、第一八八条目です。

聖人の御流は、たのむ一念の所、肝要なり。故に、たのむと云うことをば、代々、あそばしおかれそうらえども、委しく、何とたのめと云うことを、しらざりき。しかれば、前々住上人の御代に、『御文』を御作り候いて、「雑行をすてて、後生たすけたまえと、一心に弥陀をたのめ」と、あきらかにしらせられ候う。しかれば、御再興の上人にてましますものなり。

（真宗聖典八八八頁）

とあります。すなわち、親鸞聖人の教えは「信の一念」が肝要である、ゆえに代々の本願寺住職もそのことを教えてきた。しかし、人々はどのようにしたら信を獲ることができるのかわからなかった。それを、上人が『御文』を作って「雑行をすてて、後生たすけたまえと、一心に弥陀をたのめ」と教えてくださった。そのことによって、人々は信を獲ることができるようになった。だから「再興の上人」と称するのである、ということです。

上人の真宗再興の事業は、人々に念仏を手渡すために具体的にさまざまな形を

とって実践されていきました。その主なものに、門徒大衆に聖典（正信偈・念仏・和讃の勤行本）を配布して朝勤めをすすめられたこと。また、「南無阿弥陀仏」の名号を多くの人々に書き与えて、仏と共にある生活を開いていかれたことなどがあります。そしてその中心にあるのが、二百二十通に余る『御文』の製作です。

その『御文』をあらわされた上人のお心、そして『御文』とはどのような聖教なのかということについて、学んでいきたいと思います。

二　蓮如上人と『御文』（二）

■『御文』をあらわされた心

蓮如上人が、はじめて「御文」（以下、『御文』の一通一通を意味する場合は「御文」と記す）を書かれたのは四十七歳の時です。金森（現在の滋賀県守山市金森町）の道西という方に与えられました。上人より十六歳上で、上人の真宗再興の事業を支えた人物の一人です。道西に与えられた時の様子が、次のように伝えられています。

上人は、消息（手紙）一通を書いて道西に読んで聞かせられた。それを聞いた道西は「愚かな者も了解できるかたじけない金言である。かたじけない聖教である」といって、頂戴した。それに対して、蓮如上人は「聖教といえば恐れ多い、また特別な法門があるように思われる。消息法語というのもぎょうぎょうしい。ただ在家の男女に勧めるためであるから、ふみといえ」とおっしゃいました。

（慧空『御文歓喜鈔』意訳）

ここには、『御文』をあらわされた上人のお心が示されています。日々、煩悩

やさまざまな出来事に振り回されて生きている者（在家の男女）が、そのような生活の中で念仏のこころをいただけるようにと書かれたものです。

「正信偈」「和讃」とならんで、『御文』ほど多くの人に読まれ、人々に念仏の信を開き、念仏生活を培ってきた聖教はないといってもよいでしょう。かつては、山仕事や行商など、さまざまな仕事の場所へ持っていき、仕事の合間にも読まれたものです。そのことを示すように、指でくった跡が、すり切れるようについている『御文』を目にすることがあります。まさに、人々の生活と共にあった大切な聖教なのです。

その『御文』を、上人がどのようにしてあらわされたのかについて、次のような言葉が伝えられています。

かるがると愚痴の者のはやく心得まいらせそうろうように、千のものを百に選び百のものを十に撰ばれ十のものを一に、早く聞き分け申す様にと思し召され、御文にあそばしあらわされて、凡夫の速やかに仏道なる事を仰せ立てられたる事にてそうろう。

（たやすく、愚かな者が早く念仏のこころを受けとれるように、千のものを百に約（つづ）め、百のものを十に約め、十のものを一に約めて、早く明瞭にすることができるようにと思われて御文をお書きくださり、凡夫が速（すみ）やかに救いを得ることができるようにあらわしてくださったのであります。）

（『蓮淳記』）

人々が念仏のこころを速（すみ）やかに受けとることができるようにと、親鸞聖人の教えを約（つづ）めに約めてあらわされたものであるということですが、この言葉から、蓮如上人の、聖人の教えに対する徹底した学びが土台となって『御文』をあらわされたことが知らされます。そのような学びにもとづいていればこそ、「千のものを百に、百のものを十に、十のものを一に」まで凝縮（ぎょうしゅく）して、その要（かなめ）を表現することができたのでしょう。

『蓮如上人御一代記聞書』に、「聖教はよみやぶれ」（第六九条）とありますが、それは、まさに上人自身の信を獲るための学び方であり、そのような学びの上にあらわされたのが『御文』であります。

■『御文』とは

『御文』の文章について、五木寛之氏は、

ある状況下においてそれを聴くとき、思いがけない大きな力で人をゆさぶる文章なのです。

（『蓮如』岩波書店発行一五四頁）

と述べておられます。また蓬茨祖運先生は、

文章をざっと読んだだけでは何のことかと思われるようなところでも、それを繰り返し繰り返し読むことによって、やがて今までにない感動というものがあるのでございます。

（『お文に学ぶ』名古屋教務所発行六一頁）

と語っておられます。『御文』の文章の持つそのような力が、日々の生活の中で人々に拝読させ続け、念仏に生きる生活を開き続けてきたのでしょう。

しかし、その『御文』の力は何によるのでしょうか。念仏の信を伝えようとする上人の情熱によるものでもあります。しかし、より根本的には、『御文』が単

なる教化者意識によって書かれたものではないからであるといえます。蓬茨先生が、「『御文』は第二十願の問題なのです」と指摘されたということをお聞きしたことがあります。第二十願とは、『大無量寿経』に説かれている、本願を充分に受けとれず、人生の依り所を念仏一つに定めきれない人にかけられている阿弥陀の願いのことです。蓬茨先生のお言葉は、上人ご自身をも含めて、念仏に生きようとする者の根本問題を見出してあらわされたのが『御文』であるということを教えてくださっています。そのことからすれば、自らも念仏一つに定まらない者として常に新たに阿弥陀の願心（迷いの衆生を救うという願心）を聞き開き、惑いを超えて、人々と共に本願に立ち返っていこうとしてあらわされたものが『御文』であるといただかれます。書くことによって、上人自身も信を明らかにして救いを得ていかれた、それが『御文』であるということです。「御文」を書くことが、上人自身の求道の歩みでもあったのでしょう。だからこそ、生き生きとした力ある響きをもって私たちにせまってくるのです。

上人は、四十七歳から八十五歳で亡くなる三カ月前まで、二百二十通をこえる

「御文」を書かれました。その中から八十通が選ばれて『五帖御文』としてまとめられています。帖は冊という意味です。一帖目から四帖目までの五十八通は書かれた順に編纂されており、書かれた年月日が末尾に記されています。それに対して、五帖目には年月日が記されていません。五帖目の『御文』は本願念仏の道理が簡潔に記されていて、同じ内容のものが何通もあったりします。『御文』の中でも外的な縁や事情によることなく、いわば純粋な法語として書かれたものが五帖目ということです。それで、年月日を書く意味がないものがまとめられているのです。そのようなことから、「末代無智の御文」にはじまる五帖目が、特に親しまれているのです。

これまで『御文』は、多くの場合、お寺や一件一件での法事などの集まりの場で、拝読されるのを聴くという形で伝えられてきました。そのことは、『御文』は理解するものではなく、「聴くこと」をとおしていただいていくものであることを示しています。一人ひとりにおいていただく場合にも、聴くようにいただくことの大切さが教えられています。それは、日々の生活の中で繰り返し繰り返し

拝読するということでしょう。そこに『御文』のこころが力ある響きをもって聴かれ、聴く人に自(おの)ずからに信が恵まれるということです。

最後に一言。ほとんどの「御文」が「あなかしこ」で結ばれていますが、それは敬意をあらわす語で、手紙の終わりに用いられる言葉です。

三　御同朋として

一帖目第一通（一）

一帖目第一通「ある人いわくの御文」

【本文】

ある人いわく、当流のこころは、門徒をばかならずわが弟子とこころえおくべく候うやらん、如来・聖人の御弟子ともうすべく候うやらん、その分別を存知せず候う。また、在々所々に小門徒をもちて候うをも、このあいだは手次の坊主には、あいかくしおき候うように、心中をもちて候う。これもしかるべくもなきよし、人のもうされ候うあいだ、おなじくこれも不審千万に候う。御ねんごろにうけたまわりたく候う。

答えていわく、この不審もっとも肝要とこそ存じ候え。かたのごとく耳にとどめおき候う分、もうしのぶべし。きこしめされ候え。故聖人のおおせには、「親鸞は弟子一人ももたず」とこそ、おおせられ候いつれ。「そのゆえは、如来の教法を、十方衆生にとききかしむるときは、ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとに

もおしえきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをおしえて弟子といわんぞ」とおおせられつるなり。されば、とも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は御同朋・御同行とこそかしずきておおせられけり。されば、ちかごろは大坊主分のひとも、われは一流の安心の次第をもしらず、たまたま弟子のなかに、信心の沙汰する在所へゆきて、聴聞し候うひとをば、ことのほか説諫をくわえ候いて、あるいはなかをたがいなんどせられ候うあいだ、坊主もしかしかと信心の一理をも聴聞せず、また弟子をばかようにあいささえ候うあいだ、われも信心決定せず、弟子も信心決定せずして、一生はむなしくすぎゆくように候うこと、まことに自損損他のとが、のがれがたく候う。あさまし、あさまし。

―続く―

（真宗聖典七六〇～七六一頁）

【意訳】

ある人がいうには、「真宗では、門徒を我が弟子と心得るべきでしょうか。そ

れとも如来・聖人のお弟子と申すべきでしょうか。そのことがはっきりいたしません。また、あちこちに少しの門徒を持っている人の中に、この頃では、門徒を所属する寺の住職に隠しておくように思っている者がおりますが、そのようなことをしてはならないという人がいます。このこともはっきりしません。これらのことを詳しく教えていただきたいのです」。

答えていうには、「これらの不審は、大変重要であると思います。一通りのところですが、私が聞いておりますことを申しますので、お聞きください。故親鸞聖人は『親鸞は弟子一人ももたず』と仰せになられました。そして『そのわけは、如来の教法を、十方衆生に説いて聞かせる時は、ただ如来の代役を務めているに過ぎないのです。決して、親鸞はめずらしい教えをひろめているのではありません。如来の教えを、私も信じ、人にも教え聞かせているだけなのです。そのほかに、どのようなことを教えて、弟子というのでありましょうか』と仰せられたことでした。そのようなことですから、みな友であり、同じ道を歩む同行というべきものなのです。それで聖人は、人々に対して御同朋・御同行と敬って仰せに